

えどがわく ちめい
江戸川区の地名(1)

しし ぼね
鹿 骨

地名の由来

昔、常陸国(現茨城県)鹿島郡かしまぐんの鹿島大神かしまおおかみが大和国やまとのくに
(現奈良県)の春日社かすがしやへ向かう途中に、大神の杖とな
ってお供していた鹿が病気で倒れ、死にました。そ
れを、この地の人しし みづかが手厚く葬りました。そのときに
築いた塚ししぼねを鹿見塚かすみづかといいます。「鹿骨」の地名は、
この塚ししぼねに由来すると言われていています。塚は、今も鹿
骨三丁目にある鹿見塚神社内に残っています。

鹿見塚はかつて7~8mに土盛りされた塚に、太い
老松が植わっていました。その松が寿命尽きて倒
れ、残りの松も伐り払われ、塚も掘り返されました。

昭和42年(1967)、鹿見塚神社に「鹿見塚」と刻んだ石碑が建
てられ、鹿骨発祥の地の由来を今に伝えています。

鹿骨

鹿骨は古くから人が生活をしてきた地域で、応永5年(1398)
の『葛西御厨注文』かさい みくりやちゅうもんでは「鹿骨」「一色」「松本」の3地名が登
場しています。また、鹿骨では多くの板碑いたびが見つかっており、

区内で二番目に古い正応3年(1290)9月の日銘をもった板碑も鹿骨で見つかりました。

花の町 鹿骨

俳人石田波郷いしだ はきょう (1913~69)の『江東歳時記』こうとうさいじ き (1966)に冬の鹿骨の情景が描かれています。
「鹿骨はごぞんじ花作りの村。畑に温床に一年中花の絶え間がないが、年の暮れも



鹿見塚神社



鹿見塚の石碑

ようやく近いこの頃、ハンの畔木の林立する間に、美しく畑をいろどっているのは葉牡丹だ。縮緬等のナゴヤ種、葉のちぢれない地八ボ(地の牡丹)の二種がある。地八ボは美しさに劣るが強い野趣がある。」

江戸川区の園芸花卉栽培は、江戸時代に東小松川村の大杉方面で菊栽培を始めたことに由来すると伝えられています。その後、付近の村々に広がってゆき、明治から大正にかけては瑞江・鹿本方面でも盛んになりました。

鹿骨では、新潟方面から取り寄せた苗で芍薬や牡丹の栽培を始め、大正12年(1923)の震災を契機に野菜栽培から花卉に転換する農家が増えました。金盞花、桜草、矢車草などの草花を大八車に積んで、埼玉・千葉から茨城あたりまで行商に出かけたそうです。

戦争中は一時的に野菜作りが中心になりましたが、戦後には回復し、朝顔をはじめとして鉢物の卸売りも増えてきました。東京の花暦で「春は鹿骨の花からはじまる」と言われたほどです。現在では、四季を通して苗ものを中心に年間80万近い出荷があり、作付面積も増えています。

入谷の「朝顔市」や浅草寺の「ほおずき市」などに大量に出荷され、夏の風物詩として話題になっています。年末から正月にかけては、シクラメンやポインセチアなどの花が彩りを添えています。



シクラメン



さまざまな花卉の栽培

江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)